

2023年10月の総評：木下龍也

長靴を抜き差しされてぬかるみは 二足歩行の生き物を知る／常田瑛子

「ぬかるみ」にとっての「知る」は、人間にとっての「知る」とは違う。「長靴を抜き差しされて」深く自身に足跡を刻み込まれなければ、人間のように目も鼻も耳も口も手もない「ぬかるみ」は、何かを「知る」ことすらできない。神経もないだろうから痛みはないかもしれないが、そんなふうに自身を変形させなければ何かを「知る」ことができないというのは、人間から見れば痛々しく、切ない。そういうふうに「ぬかるみ」に寄り添うことができるのも人間であり、「ぬかるみ」に「二足歩行の生き物」を足跡で刻み込むのもまた人間である。さらに切ないのは「ぬかるみ」がひとときの存在であるということだ。雨上がりに「ぬかるみ」はできて、足跡を刻まれながら「二足歩行の生き物を知」り、足跡を刻まれたまま干上がり、そこはもう「ぬかるみ」ではなくなる。だったら「知る」ことに何の意味があるんだろう。わからないけれど、今後、足跡の形に干上がったかつての「ぬかるみ」を見るたびに、ああ、「知」ったのだなと思い出すことになる歌である。

カントリーマアムのない味を 言い合って言い尽くしてから 渚になった／白野

思いつく限りのすべてを「言い尽くし」と読むか、本当にすべてを「言い尽くし」と読むかで、「渚になった」の受け取り方が変わるように思う。期間限定商品や地域限定商品を含めると、現在「カントリーマアム」は32種類あり、その味もバラエティに富んでいる。が、やはり「ない味」のほうが多いため、現実としては、思いつく限りのすべてを「言い尽くし」と読むほうが自然である。その場合、「渚になった」のは風景だろう。海を目指して歩いているふたりが「ない味」を「言い尽くし」た頃、目の前の風景がちょうど「渚になった」。時間にすれば数時間のそんなシーンが描かれている。本当にすべてを「言い尽くし」と読むならば、「渚になった」のはこのふたりだろう。「ない味」を「言い尽くす」には、途方もない時間が必要なはずだ。その途方もなさの先でふたりは土に還り、「渚」の一部「になった」。時間にすれば数十年、数百年の幻想的なシーンが描かれている。どう読

むかによって時間が伸び縮みし、現実にも幻想にも行き来できるのは、「言い尽く」す、の範囲が意図的に省略されているからだろう。その仕掛けが巧みである。

雨が壊れている

どうして

大宮駅の改札にあなたの洗濯機／駒鳥朋名

雲や空「が壊れている」ならば、土砂降りのことではないかと推測できるのだが、「雨が壊れている」とはどういうことなのだろう。「雨が」地面に当たってはじける様子を「壊れている」と言っているのだろうか。とりあえず読み進めると、もっとわからなくなる。「どうして大宮駅の改札にあなたの洗濯機」があるのか、と主体は疑問に思っている。もちろん僕にも「どうして」なのかわからない。幻覚では？と冷静に言えそうにないのは、この文字列を読んでいる僕の頭にも体言止めによってはっきりと「洗濯機」が見えてしまっているからだ。伝聞ではなく、となりでほぼ同じ光景を見ているからだ。ゆえに「どうして」と主体と同じように動揺してしまう。「雨が壊れている」ことと「あなたの洗濯機」が「大宮駅の改札に」あることに因果関係があるのだろうか。だが、主体に聞ける状況ではない。主体も切迫している。「洗濯機」を見てからは一步も動けないし、出口も見つけられない。この歌を読むと、主体とふたりきりで混乱のなかに、「どうして」のなかに、閉じ込められてしまう。恐ろしい。

ピアノカをファンと鳴らせよ

惜しみなく

大人になってもきみはひとりだ／マズルカ

「ピアノカ」とあるから小学生だろう。自分は「ひとりだ」と感じている子ども。そんな「きみ」に投げかけられる言葉として「大人になってもきみはひとりだ」はあまりにも重い。どうして希望を持たせてやらないのだろうか。どうしてそんなふう未来を断定できるのだろうか。それはおそらく「大人になってもきみはひとりだ」という言葉を「きみ」に投げかけているのが、大人になった「きみ」だからだ。現在の自分から、過去の自分へ投げかけられた言葉なのだ。だから無闇に希望を持たせることが無意味だとわかっているし、未来を見通せるような超能力がなくても、未来を断定できる。「大人になっ」たら「ひとり」じゃなくなるよ、という嘘は、今の結果を知っているからこそ、つけない。子どもの「きみ」は「ひとり」でなく

なるという未来に希望を持って、「ピアニカ」を控えめに吹いていたのかもしれない。クラスで浮かないように、はみ出ないように。けれど、そんなことをしても、それから、「大人になっても」、どうせ「ひとり」なのだ。だったら周りの目を気にするな、というメッセージが「ファンと鳴らせよ惜しみなく」には込められているのだろう。切なくもあるが、清々しくもある。

付け爪で夜と朝とを切り分けて 明るい方をわたしにくれた／汐見りら

あまり馴染みのない僕にとって「付け爪」のイメージは、かつての渋谷のギャルの方々の「爪」であるが、あれは超ロングネイルらしく、それ以外にも自「爪」と同じくらいの長さのショート、それよりやや長いミディアム、もっと長いロングなどがあり、わりと一般的なものらしい。「夜と朝とを切り分けて」とあるから、この「付け爪」は刃物として機能しそうなミディアムから超ロングまでの長さであるはずだ。そういう神のような、魔法のようなことのできる人物が「付け爪」をしているのが新鮮に感じられるのだが、そういえば魔女の「爪」はかつての渋谷のギャルの方々の「付け爪」くらい長い。だとしたら「付け爪」は一般人が魔法使いになるためのアイテムなのかもしれない。そんな「付け爪」の主は「切り分け」た「夜と朝」の「明るい方をわたしにくれた」。「明るい」が明度のことなのか、賑やかさのことなのかかわからないが、いずれにせよ「付け爪」の主は暗い方を引き受けたのだろう。優しさという言葉では収まらない、自己犠牲というか、そんな神聖さまで感じさせる一首だ。

おれたちは水にはなれないで ただ国とか市とかに関係がある／森榮太

「おれたち」の身体はほとんどが「水」でできていて、成人では体重の約60%～65%を「水」が占めているのだが、残りの約40%～35%のせいで「水にはなれないで」それぞれに身体や戸籍を持ちちゃって、教育とか勤労とか納税とかしながら常に「国とか市に関係がある」。あと約40%～35%なのね。そこをクリアして100%水になれば、何かに縛られることもなく、どこを流れたっていいし、教育とか勤労とか納税とかもなくて自由なわけ。宗教も政治も戦争もないぜ。ほんと「おれたち」は約40%～35%のせいで管理したり管理されたり愛し合ったり傷つけ合ったりしてどうしようもないよな、ってことも「水にはなれない」から考えられることか。

ぶきように
つむいだ手話の
つばくろ、が
あなたの胸で羽ばたいている／さいう

「つばくろ」はツバメの別名。YouTubeで〈手話動画 ツバメ〉と検索すれば、どんな手話なのかを観ることができる。さて、この歌において「手話」をしているのは、①主体と②「あなた」のどちらだろう。①の場合、主体が「つむいだ」「つばくろ」の「手話」の影が「あなたの胸」のあたり「で羽ばたいている」ような動きをしている、と読める。あるいは、その「つばくろ」は「手話」としてだけではなく、思い浮かべることのできる映像として「あなたの胸」の内まで届いた、それを「あなたの胸で羽ばたいている」というふうに表示している、と読める。②の場合、あなたが「つむいだ」「つばくろ」の「手話」が「あなたの胸」のあたり「で羽ばたいている」ような動きをしており、主体はそれを見ている、と読める。冒頭に「ぶきように」とあるため、僕は最初①で読んでいたが、主体が長年「手話」をしており、「あなた」が最近始めたのであれば、主体から「あなた」に対して「ぶきように」と言う②の場合もありうるはずである。どちらで読んでも、情景として美しく、おそらく初めて「手話」で「つばくろ」が「つむ」がれた瞬間の、二度とはない感動を、一首に保存できている。

社内外ともにいわしという評価／松下誠一

とあるお菓子メーカーが「いわし」味の新商品を出すことになり、試作品を「社内外」の人に食べてもらって、これは「いわし」味ですか？というアンケートを実施し、①「いわし」味である②どちらかという「いわし」味である③わからない④どちらかといえば「いわし」味ではない⑤「いわし」味ではない、の項目のうち、大多数が①か②を選んだ場合の調査報告書にありそうな一文ではある。メーカー側としては、「いわし」味の新商品が「いわし」味であると判断されることにはおそらく価値があるため、そこに「評価」という言葉が置かれていても不自然ではない。が、厄介なのは「いわしという評価」という言葉である。味とは書かれていない。何が「いわしという評価」をされたのだろう。「いわし」の切り身を食べさせて、これが「いわし」かどうかをアンケートを実施したということ？その場合は「評価」ではなく判断という言葉が相応しいのでは？そもそもそんな調査に何の意味があるんだ？「社内外」という広い範囲の人間の多くが「いわしという評価」をしている

それは一体何なんだ？その評価ってポジティブなものなのネガティブなものなの？と、読み返すたびにひとりで混乱し、ひとりだけ取り残されているような気分になる句で、とても面白い。

おいそこのお

はみでてるからあ

しまっとけえ／あらしレコード

「のお」「らあ」「けえ」という語尾から、この呼びかけがある程度の大声で発せられていること、両者の間にはある程度の距離があるということが推測できる。状況としてまず浮かんだのは人文字だ。校庭に生徒らが何らかの文字をつくっており、それを教師が校舎の屋上から指示をしている。あるひとりの生徒がその文字の構図から「はみでて」しまっている。そのときに教師がその生徒に向けて発した言葉、というふうに捉えようとした。が、その場合、一歩右い、二歩左い、とは言えても、「しまっとけえ」とは言わないはずだ。それでは指示が通らない。けれど、そう呼びかけているということは、「はみでてる」のは、人物そのものではなく、その人物から「はみでてる」何かであり、本来は「はみでてる」べきものではない何かということだろう。何が「はみでてる」のか。何を「しまっとけえ」と言われているのか。尻尾？まあ、ここから先はみなさんの想像にお任せするが、これを言われた当人はかなり恥ずかしい思いをしたはずである。

黙祷さえ、倍速にした月曜日／源楓香

「黙祷」のシーンがあるということは、ニュースの録画や見逃し配信などだろうか。観ないという選択肢もあるはずだが観ているということは、興味があるか、その番組の別のトピックに興味があつてたまたま観てしまっているか、宿題や仕事のために観なければならない映像なのだろう。ただ、その日は「月曜日」だった。休日が終わりに、学校や会社に出かけて授業や業務をこなし、帰ってきてからもこれから火・水・木・金とあるため、体力温存のためにもはやく眠らなければならない。翌日が休みの金曜日なら夜更かしをしたって構わないが、「月曜日」には時間も余裕もない。それゆえの「倍速」視聴なのだろう。死者に対し弔いの意を込めて祈りを捧げる人々の映像「さえ、倍速にした」。してはいけないことだ、という意識はあるが、明日のことを考えると、せざるを得ない。〈黙祷を倍速にした月曜日〉とすればきれいに575となるが「さえ、」は、後悔の表現としてあえて置かれているのだ。

タイパタイパと言われる世の中で、忙しさに流されっぱなしではなく、自身を省みたり、立ち止まることの大切さも教えてくれる句だと思う。

以上です。たくさんのご投稿ありがとうございました。

11月のご投稿も楽しみにしております。寒いのでご自愛くださいませ。

木下龍也